

J A 秋田おばこの子育て支援

～母親の学びをサポートする「Chou-Chou-Mam」の取り組み～

研究員 福田 いずみ

目次

- | | |
|--------------------------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 地域の子育て中の若い母親のニーズ |
| 2. J A 秋田おばこの概要 | 5. 部署間の垣根を越えて |
| 3. J A 秋田おばこ「Chou-Chou-Mam」
の取り組み | 6. おわりに |

1. はじめに

現在、在宅子育て家庭への支援（以下、地域子育て支援）には、国の制度として進められてきた地域子育て支援拠点事業があり、各自治体による様々な類型の子育て支援制度が設けられている。

その他、特に都市部を中心に国や自治体の制度の適用を受けない民間の子育て支援も多く存在し、法人などによる組織的な取り組みから地域のニーズを反映させた小さなグループ活動まで、官民を挙げての多様な子育て支援が展開されている。

J A においても、J A あるいは J A 女性部が主体となり、全国各地¹で地域子育て支援活動を実施している。いずれの取り組みも J A の物的・人的資源を活用し、「J A の子育て支援」として行政とは異なる独自性を発揮している。

これまでに筆者が調査を行ってきた J A の子育て支援活動の特徴を具体的に述べると、

- ① J A の会議室や調理室などの自前の施設を活用して地域の親子に交流の場を提供している。
- ② 収穫体験や料理教室などの「食」や「農」に関連したプログラムを取り入れ、J A ならではの特色を発揮している。
- ③ 地域の支援のニーズの掘り起こしを行い、行政の子育て支援とは異なる独自の支援内容を展開し、若い世代に J A をアピールする機会となっている。

の3点が挙げられる。

本稿では、3つ目の特徴として示した「地域の若い世代へのアプローチ」を目指し、母親の学びに重点を置いた子育て支援を展開している J A 秋田おばこの子育て支援「Chou-Chou-Mam」の取り組みについて報告する。

2. J A 秋田おばこの概要

J A 秋田おばこは、平成10年4月1日、大曲仙北地区1市10町3村にあった20 J A が合併して誕生した。その後、行政による市町村

1 秋田県、岩手県、宮城県、茨城県、神奈川県、岡山県、福岡県、鹿児島県などの J A で実施している。

合併が進み、2市1町（大仙市、仙北市、美郷町）を管内とする広域JAとなり現在に至っている。

JA秋田おばこの基幹作物である米は、取扱量・販売高ともに全国一を誇る。また、園芸作物は、重点推進10品目（ホウレンソウ・アスパラガス・枝豆・トマト・キュウリ・そら豆・モロヘイヤ・キャベツ・しいたけ・花き）について地域推進品目の作付け拡大を図っており、生産者の所得向上・地域振興への役割も担っている²。



出典：<https://ja-obako.or.jp/obako>

3. JA秋田おばこ「Chou-Chou-Mam」³の取組み

ここでは、「Chou-Chou-Mam」の取組みの経緯や概要を示すとともに、昨年度の活動内容について述べる。

(1) 取組みの経緯

JA秋田おばこの「Chou-Chou-Mam」の取組みの発端は、JA女性部員数の減少を

はじめ、JAと地域の若い世代との関係が希薄な現状に危機感を覚えた同JAの営農企画課の女性職員（生活指導員）が「JAの次世代に向けたアプローチ」として考案した子育て支援活動である。



「シンボルマーク」

(2) 「Chou-Chou-Mam」の概要

「Chou-Chou-Mam」は、地域の子育て中の若い母親を対象に「毎日子育てをがんばっているママたちに、ちょっとだけ自分のための時間を」⁴という願いを込め、平成25年5月から活動を開始。料理教室などの講座を年間6回実施している（資料1）。

（資料1）JA秋田おばこの子育て支援「Chou-Chou-Mam」の概要

名称	「Chou-Chou-Mam」
コンセプト	～私と一緒にお気軽に入り（楽しい）時間を過ごしましょう～
対象	JA管内在住の未就学児を持つ母親
実施開始・開催頻度	平成25年5月～年間6回
担当部署	営農経済部 営農企画課
年会費	600円
年間予算	350,000円

² JA秋田おばこウェブサイト<https://ja-obako.or.jp/obako>より引用

³ 命名の由来：女性が髪を結ぶ際に用いるとともに存在感がある「シュシュ」。フランス語では「お気に入り」という意味もあり、JAもそうありたいという願いと「ママ」を結び付けた造語。

⁴ 「Chou-Chou-Mam」の募集チラシより引用

取組みの周知にあたっては、大仙市健康増進センターの協力を得て市内で活動している子育てサークルの代表に連絡を取り、サークルのメンバーに「Chou-Chou-Mam」の取組みを紹介するなどして地域の若い母親たちへの参加を募った。その他にもJAの広報誌などで情報を発信した結果、参加者などの口コミ等で徐々に広がりを見せ、当初11名だった会員が平成27年7月末日現在で45名までに拡大した。

なお、会員となった女性のほとんどが非組合員である。

(3) 若い母親の関心を引く多彩なプログラム

昨年度の実施内容をみていくと、若い母親たちの参加モチベーションを高めるためのこだわりや工夫が凝らされたプログラムとなっている。

具体的には、料理研究家を招いての料理教室や専門講師によるフラワーアレンジメントなど「質」にこだわった母親の学びの講座を中心に設え、そこに「子どもと一緒に収穫体験」⁵などの親子で楽しめる多彩なプログラ

(資料2) 平成26年度「Chou-Chou-Mam」実施内容

	月	場 所	内 容
1	5月	はびねす大仙	料理教室
2	7月	大仙ふれあい文化センターそば	子どもと一緒に野菜の収穫体験
3	10月	はびねす大仙	料理教室
4	12月	JA仙北支店	フラワーアレンジメント*
5	1月	JA仙北支店	ミシンで手作り！手芸教室
6	2月	JA仙北支店	ミシンで手作り！手芸教室

*一部自己負担あり

ムが加えられている(資料2)。

JAの担当者によると、プログラムの中では料理教室の人气が最も高いという。JAサイドとしても、料理教室は若い母親たちに「食」の大切さを伝えるよい機会であり、特に米をはじめとする地元の農産物を使ったメニューを積極的に取り入れることで農業振興にもつなげていきたいとしている。

(4) 託児の方法

「Chou-Chou-Mam」の目的は、乳幼児を抱えている時期はなかなか自分の時間が持てない若い母親たちに「自分のための時間」を過ごしてもらうことにある。そのため料理や手芸などの講座を受講している間は託児室を設け、子どもを預かるシステムをとっている。保育を担当しているのは、JA職員(女性)と自治体に登録している子育てサポーターサ



写真1 JA職員と子育てサポーターの協力による託児

5 JA秋田おばこ女性大学「野菜のいろはコース」で栽培した野菜を親子で収穫体験した。

6 「スマイル」は、子育て支援の講習会を受けた方々が個人託児や集団託児、子どもの送迎や学童保育などで支援活動を行う有償ボランティアサークル。大仙市、仙北市、美郷町において活動している。(『子育て応援ハンドブック』大仙市役所児童家庭課 平成26年度発行) より

ークル「スマイル」⁶のメンバーである。

この活動を始めた当初は、JA職員（生活指導員）が数名で保育に当たっていたが、職員だけで集団保育に対応することが技術的に困難であったことや、日程によっては人員の確保が厳しいといった理由から、自治体の子育てサポーターのシステムを利用するに至った。現在は子育てサポーターの協力を得ながら安定的に託児を行っている（写真1）。

4. 地域の子育て中の若い母親のニーズ

本章では、JA秋田おばこ管内の3つの自治体（大仙市、仙北市、美郷町）の子育て支援の状況をウェブサイトと電話取材により調査した結果と、筆者が行った現地ヒアリングの中から抽出した参加者の意見、および「Chou-Chou-Mam」の取組みの今後の展開について示す。

(1) 地域の子育て支援の状況

JA秋田おばこの管内では、各自治体が保育園や認定こども園などの保育施設内で「子育て支援センター」や「つどいの広場」などの支援事業を展開し、地域の在宅子育て支援の中核を担っている。

自治体以外の取組みでは、人口の多い大仙市において、子育て中の母親たちが自主的に活動している育児サークルや、先述した「スマイル」のような子育て経験者等による子育てサポーターサークルなどの活動が確認できた。

子育てをする親にとって、子育て支援は身近な場所で行われていることが必要であり、また、お互いの顔が見える小さな規模のものに参加しやすさを感じる人も少なくないのではないか。その意味において民間などの様々

な子育て支援活動が存在することが、地域の子育て環境を豊かにしていくと考える。このような理由からもJA秋田おばこの子育て支援は、地域において大変貴重な活動であるといえよう。

(2) 参加者へのヒアリングで見た地域の子育て支援のニーズ

去る5月28日、今年度に入って初めての「Chou-Chou-Mam」が実施された。公共施設「はびねす大仙」の調理室を利用し、地元料理研究家を招いての料理教室「大切な記念日簡単おもてなしレシピ」には、定員を上回る応募があった。

当日、16名の参加者は、子どもを託児室に預け、安心して調理実習に集中していた（写真2）。



写真2 調理実習

この日、筆者が調理実習中の母親たちに「Chou-Chou-Mam」の活動に対する感想などをヒアリングしたところ、参加者から様々な意見が寄せられた。その中から多かった意見を抽出すると、以下の4つがあげられる。

1. 「地域の子育て支援は子ども中心のプログラムなので「Chou-Chou-Mam」のような母親のための企画に出会ったことがなかった」
2. 「託児付の料理教室をやっているのはここだけ。近くに子どもを預かってくれる人がいないので子連れで参加できることがありがたい」
3. 「毎回おしゃれで充実した内容なのに年会費600円は安い。ママ友の間でとても評判がいい」
4. 「Chou-Chou-Mam」に参加して、JAの組合員ではない自分もJA共済やJAバンクを利用できることを初めて知った。食材を買う時や生活の中の様々な場面でJAを意識するようになった」

これらの意見から、この地域の子育て支援の中で「Chou-Chou-Mam」の取組みが母親の学びに重点を置いた貴重な取組みであり、活動に参加してもらうことでJAとこれまで縁の無かった参加者にJAの事業を知ってもらう機会につながっている可能性を窺い知ることができた。

(3) 今後の展開

「Chou-Chou-Mam」の活動を立ち上げたJAの担当者は、「これまでは参加者のニーズに合わせた講座を中心に企画・運営してきたが、これからはJAの活動としての使命を果たせるような工夫を加えていきたい」と今後の抱負を述べた。

具体的には、子どもを持つ親が知っておくべき「食の安心・安全」や「TPP問題」などの食に関する講座をプログラムの合間に入れるなどして、参加者に農業やJA事業への理解を深めてもらうことを検討しているとのこ

とである。

5. 部署間の垣根を越えて

本章では、昨年度の「Chou-Chou-Mam」の取組みの中で実現した他部署との連携について述べる。

(1) 共済推進課との連携

営農企画課では、「Chou-Chou-Mam」の実施にあたって参加者の万一の事故に備えて傷害共済を掛けている。その手続きを行う際に、同JAの共済推進課に「Chou-Chou-Mam」の取組みを伝えたところ、子育て中の若い母親が対象の「新たな世代との取組み」という趣旨に賛同を得ることができ、昨年度は参加者への粗品の提供や託児の手伝いなどの協力を受けた。

また、地域の若い世代の生活上のニーズを把握するため、両課共同で参加者へのアンケート調査も実施している。この取組みは、共済推進課にとってもJAとの関係が希薄な地域の子育て世代にJA共済を知ってもらうだけでなく、母親たちとのコミュニケーションを通して参加者の生活実態やニーズなどを直接知ることができる貴重な機会となっている。

(2) 共通の問題意識

この連携の背景には、子育て支援の取組みに意義を感じると同時に、10年後、20年後のJAのためにも地域の若い世代とのつながりを積極的につくっていききたいという部署や担当業務を越えた職員同士の共通の思いがある。

中でも現在子育て中という若手職員等の「少子高齢化」や「JA組合員の世代交代」に対する共通の問題意識が、部署を越えた連

携に至る大きな力となっていた。

6. おわりに

全国共済農業協同組合連合会が調査主体となって全国のJA組合員を対象に実施している「くらしの保障についてのアンケート」の平成26年度調査結果⁷によると、JAが取り組んでいる様々なサービス事業や活動等に対する関心度は、60歳以上で健康管理や介護・福祉面が高く、若年層は「金融・共済に関するセミナー」や「祭りやスポーツ大会などイベント活動」、「料理教室」、「子育て支援」、「子供会活動」などの取組みについて関心が高いという結果が示された。

また、一般社団法人長野県農協地域開発機構が実施した調査⁸においては、JAの活動に参加することがJAに対する意識の変化や事業利用につながっていることを示唆する研究結果が報告されている。

子育て支援活動は、地域の若い世代が必要としている取組みである。しかしこれからは、一方的に支援やサービスを提供するだけに止まらず、地域住民の参加モチベーションを高め、能動的にJAの活動に関与してもらうことに注力していくことも重要であろう。そうしていくことが、結果的に将来の組織基盤づくりへとつながっていくのではないか。

今回報告した「Chou-Chou-Mam」のような取組みが、地域の若い世代とJAの架け橋となるとともに、JAの独自性を発揮しながら地域子育て支援の一翼を担っていくことを期待したい。

《参考文献》

- ・北川太一（2010）『いまJAの存在価値を考える「農協批判を問う」』社団法人家の光協会
- ・石田正昭（2012）『農協は地域に何ができるか 農をつくる・地域くらしをつくるJAをつくる』社団法人農山漁村文化協会
- ・大泉一貫（2014）『農協の未来 新しい時代の役割と可能性』勁草書房
- ・大田原高昭（2015）『私たちのJA自己改革 知っておきたい協同組合の基本と役割』家の光協会
- ・福田いずみ（2013）「農協における乳幼児支援の現状と課題」『共済総合研究』農協共済総合研究所（現JA共済総合研究所）Vol. 66

7 詳細は、「平成26年度「くらしの保障についてのアンケート」調査結果について」『共済総研レポート』No.139 P. 2-17 を参照のこと。

8 平成27年5月15日にJA全中くらしの活動担当者研修会において一般社団法人長野県農協地域開発機構の西井賢悟氏が講演した「JAくらしの活動の戦略的展開」において報告された「A農協における支店活動への参加の有無別に見た信用事業（貯金）の利用度合」より。なお、西井氏は講演の中で共済事業にも同様の結果がみられたと述べた。